



知事祝辞



感謝状進呈



農大40年の軌跡



決意表明



記念講演



パネルディスカッション



祝賀会



祝賀会

Thanks!



ANNIVERSARY

1978-2017

熊本県立農業大学校創立40周年



熊本県立農業大学校 創立40周年記念式典

期日／平成29年11月11日(土)

場所／熊本県立ひのくに高等支援学校 体育館

自覚

農業後継者としての自覚

農業大学校学生は、自家の農業と地域の農業を継承するという自覚を常に持っていること。

親もまた、その自覚をもって継ぐに足る農業を確立すること。

自彊

実習における自彊

農業大学校学生は、弓を引きしぼって的正対するが如く、常に心身の緊張をもって、経営と技術の実習に集中すること。

自啓

学習における自啓

農業大学校学生は、自ら心を啓き授業を把みとる意欲で勉学に勤めること。教師もまた心を啓いて先導すること。

自治

寮生活における自治

農業大学校学生は、学校・寮生活すべてを通して、自らの行動を厳しく律し、農村青年リーダーに成長すべく、自治の本質を究め、日々それにもとることがないこと。

自尊

人生における自尊

農業大学校学生は、己々、世にかけがえのない自らの存在の尊さを見出し、学友一人ひとりもそれぞれ尊い人格を持っていることを認め、人生を通じて、自尊は他尊という東洋民主主義の根源を求めること。それが農に従う者の正しい自尊、誇りであるということ。

「耕志寮」の由来

耕は農の起点、耕はカルチャーすなわち文化の語源である。常に農を継ぐという初志を耕し、培う学生皆の寮(すみか)であること。耕志はまた合志に通じ、志を同じくする若人の第二の故郷であるということである。



式典次第

- | | | |
|----|-------------------|--------|
| 1 | 開 式 | 午後 1 時 |
| 2 | 国家斉唱 | |
| 3 | 創立40周年記念事業実行委員長挨拶 | |
| 4 | 知事祝詞 | |
| 5 | 来賓祝辞 | |
| 6 | 来賓紹介 | |
| 7 | 感謝状贈呈 | |
| 8 | 農大40年の軌跡 | |
| 9 | 決意表明 | |
| 10 | 校歌斉唱 | |
| 11 | 閉 式 | 午後 2 時 |
-



熊本県立農業大学校創立40周年記念事業 実行委員会委員長挨拶

耕志会会長
堤 慎一

熊本県立農業大学校創立40周年にあたり、実行委員会を代表して一言御挨拶を申し上げます。

早いもので、合志の地に農大が開設されて40年の月日が流れました。熊本農大は、日本有数の農業県熊本において、農業の更なる発展に向けた重要な課題である担い手養成の拠点として開校しました。単なる担い手ではなく、担い手のリーダーとなる人材育成を最大の目的とし、その役割を忠実に守りながら本県農業の「一丁目一番地」として本日に至りました。

これまでの40年の歩みの中で、農業を取り巻く状況は社会の変化にもまれ、国際的にも、また国内においても大きく揺れ動いてきましたが、農大が世に送り出した3,000名余りの卒業生は、農大五訓を忘れることなく、それぞれの分野で着実に活躍の場を広めて参りました。農大が本県にとって、無くてはならない存在となっていることを真に誇りに思います。

また、この40周年の節目にあたり、これまで御尽力を賜りました関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます、今後ともなお一層の御指導、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、県立農業大学校が益々の発展を遂げ、確実な歩みを進めて行きますことを心より祈念いたしますとともに、卒業生の一人として、耕志会の名のとおり、常に農の志を耕しながら頑張っていくことを広く県民の皆様にお誓い申し上げ、挨拶に代えさせていただきます。



創立40周年によせて

熊本県立農業大学校 第21代校長
荒木 亮

創立40周年の節目を迎えるにあたり、熊本県立農業大学校を代表して一言ご挨拶申し上げます。

歴史を紐解けば、昭和53年4月に、ここ黒石原の地に開校して以来、3210名の卒業生を世に送り出してまいりました。同じ釜の飯を食った仲間として固い絆で結ばれた卒業生は、その強力なネットワークを活かしながら、県下各地でリーダーとして活躍しています。

40年という月日の流れの中、農業をとりまく環境は、世界的規模で変化を続けています。本校の置かれた状況も創立当時と現在とは大きく変わりました。

しかし、どんなに時代が変わろうとも、校訓の「自覚」「自彊」「自啓」「自治」「自尊」の教えは堅持しながら、時代の要請に的確に対応できる人材の育成に努めて参りました。特に、農業の理論と実技を同時に学ぶ本校の実践型教育は、農業技術や経営の高度化・専門化に即応できる農業スペシャリストの育成に有効に機能してきたとの自負を持っています。

今でも、多くの学生達が、幅広い知識と高い専門性を修得し、自ら考え行動する農業経営者となることを夢見て、互いに切磋琢磨しながら若い情熱を燃やしています。

昨年度の予期せぬ熊本地震では、水や食料の大切さを身を持って感じ、その食料を生産する農業の意義を、また、農業の幅広い人材を育成する農業大学校の役割を改めて認識したところです。

また、社会人向けの研修部門では、平成17年度に開始した就農支援研修が、ニーズに応じて少しずつ形を変えながら13回目の充実の時を迎えています。更に、農業者の学び直しの場として「くまもと農業アカデミー」を、若手農業者の経営力アップのために「くまもと農業経営塾」を新たに実施するなど、農業実践教育機関としての機能と魅力の向上にも努めています。

40年はひとつの通過点です。熊本県立農業大学校は、次の50年目に向けて、農業実践教育は豊かな人間教育であるとの信念を堅持しながらも、新たな視点を貪欲に取り入れつつ、熊本農業のこれからを担う学生、研修生の教育に邁進していく覚悟です。

今後ともこれまで同様、本校の発展に特段のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



創立40周年知事祝詞

熊本県知事
蒲島 郁夫

このたび、県立農業大学校が創立40周年を迎えましたことを、誠に喜ばしく思います。

本校は、昭和53年4月に、次代の本県農業の担い手と地域農業のリーダーを育成するため、農業に関する高度な知識や技術、さらには幅広い教養と社会性を培う本県唯一の農業後継者の育成機関として開校しました。今日までに3,210人の卒業生を世に送り出し、その多くは施設園芸や果樹、畜産など本県農業の中心となる作物の中核的な担い手や、地域のリーダーとして活躍中で、農業県熊本の発展に大きく貢献いただいております。

この間、農業を取り巻く情勢も大きく変化しました。消費者の食生活が多様化し、また、国際競争が激しくなる中で、農業においても高付加価値化や低コスト化がより強く求められています。また、地球温暖化等に伴い、台風や豪雨、豪雪等への備えも必要となる中、去年は熊本地震により未曾有の被害が発生しました。

このため、県では昨年12月に「熊本県食料・農業・農村計画」を策定し、熊本地震からの復旧・復興と「世界と戦えるくまもと農業」の実現を目指して様々な取組みを進めております。

中でも、農業大学校の責務である担い手の育成・確保は「稼げる農業」の更なる加速化の大きな柱であります。このため、農業大学校は全寮制の実践的な就農教育を行う農業後継者育成拠点としての創立以来の役割に加えて、農業のトップリーダーを育成する「くまもと経営塾」や、意欲のある農業者の学びの場として「くまもと農業アカデミー」を実施し、「世界と戦えるくまもと農業」を支える人材育成にも取り組んでいます。

また、Uターン就農や新規参入を目指す社会人向けの新規就農支援研修を実施するなど、新しい就農の流れにも応えています。

さらには、農業大学校の機能や拠点性を一層高めるため、新たに研修交流館の建設やほ場の拡大など、農業大学校の輝ける50周年に向けたチャレンジに踏み出すことにしています。

終わりに、これまで、本校の発展に御尽力いただきました耕志会、後援会、関係機関の皆様方に対し、厚く御礼申し上げるとともに、今後とも、皆様方の御協力と御支援を賜りますようお願い申し上げます、お祝いの言葉といたします。

農大40年の軌跡

本県の農業後継者育成機関は、農業実践教育を行う「高等営農学園」「草地畜産高等研修所」と、農業技術員養成及び後継者育成を目的として農業関係試験場に設置された「農業講習所」「果樹園芸講習所」「茶業講習所」「い業講習所」「養蚕講習所」「養鶏講習所」などが主体であった。

昭和52年4月に「農業大学校設置基本方針」が定められ、同年12月に熊本県立農業大学校条例が施行され、昭和53年4月に、従前の農業後継者育成の関連機関が統廃合され、熊本県立農業大学校として開校された。

昭和52年 9月	熊本県立農業大学校条例制定(12月施行、大学校発足)
昭和53年 4月	開校(第1期生入学式、定員120名に応募312名)
昭和56年 4月	農学科の専攻コースを再編し、農産い業・茶業・園芸・果樹・蚕業・農業団体とする。 畜産学科は従来通り、酪農、肉用牛、中小家畜。
昭和56年 7月	農学科から園芸と果樹を分離し、園芸学科を新設する。
昭和57年 4月	農学科の農業団体経営専攻を、農協教育研修センターの発足により募集停止とする (農学部定員100名となる)。
昭和58年 4月	県立農業大学校条例の再制定により、「短大2卒に準ずる扱い」を受ける大学校となる。 また、学科の再編成により、農学科が農産い業・特産、園芸学科が園芸・果樹、畜産学科が酪農・肉用牛・養豚となる。
昭和60年 4月	園芸学科が、園芸・果樹から野菜・花き・果樹となる。
昭和61年 7月	城南町の附属営農高等研修所を閉鎖(農大条例一部改正は4月施行)
昭和62年11月	創立10周年記念式典を挙げる。
平成 3年 3月	研修部を城南町から本校へ移転。この年台風19号により甚大な被害。
平成 5年 4月	阿蘇市の附属畜産高等研修所を閉鎖し、阿蘇校舎とする。
平成 8年 1月	海外農業研修始まる(この年は中国・オーストラリア方面)
平成 8年10月	熊本県立農業大学校整備基本構想が策定され、施設整備が進められる。
平成 9年11月	創立20周年記念式典を挙げる。
平成11年	第1回 全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場、農林水産大臣賞、農産園芸局長賞を受賞。
平成12年	新学生寮「耕志寮」落成。
平成13年	畜産学科2年生の阿蘇校舎での学習を本校での学習に切り替える。
平成14年	第4回 全校農業大学校等プロジェクト発表会に出場。
平成17年	第7回 全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場。
平成17年 6月	研修部において社会人を対象に「新規就農支援研修」始まる。
平成18年 4月	農学科と園芸学科を再編し、農産園芸学科、野菜学科、畜産学科の3学科となる (農学部定員80名となる)。
平成18年 6月	「専修学校」の資格を取得。卒業生は「専門士」の称号を得る。 ※以降7名が四年制大学の編入試験に合格。
平成19年 4月	授業料が有料化される。
平成19年10月	創立30周年記念式典を挙げる。
平成22年 3月	新規就農支援研修施設「自啓館」完成。農産加工施設を整備し、本格的な食品加工教育を開始。
平成22~23年	農産園芸学科に果樹鉄骨ハウス1棟、野菜学科に対候性ハウス4棟を新たに整備。 また開校当時に建築した牛舎(旧豚舎)を解体し哺育牛舎を新築。
平成24年	第14回 全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場。
平成24年 9月	研修部において「くまもと農業アカデミー講座」スタート。
平成26年	第16回 全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場。
平成27年 3月	卒業生が3000名突破。
平成27年7・8月	落雷及び台風15号では場設備、寮など甚大な被害。
平成28年 4月	熊本地震で体育館やハウス設備等に甚大な被害。38期生卒業式はひのくに高等支援学校で、 40期生入学式は農協教育センターで実施。
平成29年 9月	「くまもと農業経営塾」の窓口が研修部に移され、学生・社会人ともに農大が本県農業の 担い手育成の中核となる。
平成29年11月	自啓館隣りに農産物直売施設を主体とした交流施設を建設予定。併せて、旧寮の解体に着手。
平成29年11月	創立40周年記念式典を挙げる。

夢

農産園芸学科2年 加藤 里枝愛

- 卒業後キク農家の後継者となるとともに、地域農産物を使った農家レストランを家族で開き、地域活性化に繋がりたい。
- これまでのネットワークを大切にしながら、夢の実現に向け歩んでいく。



学

野菜学科2年 井上 拓海

- 尊敬する両親や地域の方々の農業に対する考え方を学び、高品質な野菜や米を生産する。
- 日本全国や海外にも目を向け、自分の農業の可能性を広げる。



志

畜産学科2年 西 恒耀

- 実習主体の農大での学習に加え、鹿児島大学でミクロレベルの知識も身に付け、志を高く持ち、広い視野を持って日本の農業に貢献していく。



進

新規就農支援研修生 プロ経営者コース 今坂 知章

- 環境や市場の動きに適応し変化する進化の力が農業には必要。
- 6次産業化や直接販売、顧客ニーズを汲み取り契約栽培などに取組み、しっかり稼げる農業を実現する。



興

学生会長 坂本 一步

- 地震からの復興を躍進させるには、熊本の基幹産業である農業の力が重要。
- 卒業後、農業に携わりながら、復興の一翼を担えるよう進んでいくとともに、先輩方のような地域のリーダーを目指し、熊本を農業立県として発展させるよう邁進する。



一、夢ひらく青き大地に 大阿蘇の燃ゆる朝戸出^{あさと}で
 学園の森もとどろに 拭き上ぐる若人の歌
 農大 農大 熊本農大

二、先達の汗も涙も わが胸に滲みる夕映え
 建学の使命^{つづ}度しみ 進^{ほし}める青春の意気
 農大 農大 熊本農大

三、日新の学びと技術に 生産の秘密を極め
 繁栄の平和めざして うち樹^たつる永遠の旗
 農大 農大 熊本農大

校歌

(作詞) 山口白陽
 (作曲) 出田憲二
 (編曲) 出田敬三

明るく力強く

ゆ め ひ ら く あ お き だ い ち に お
 せ ん ひ ら く あ お き だ い ち に お
 に っ だ し ん の の が く と な み だ つ に わ
 せ ー あ そ の も ゆ る あ さ と で
 が い ー む ね に し み る あ ゆ う ば え
 い ー さ ん の ひ み つ を き わ め
 が く え ん の も り も と ど ろ に ふ き あ ぐ る わ こ う の う た
 け ん が く の し め い つ つ し み ほ と ぼ し る せ い し ゅ ん の い き
 は ん え い と へ い わ め ざ し て う ち た つ る え い え ん の は た
 の お だ い の お だ い く ま も と の お だ い
 の お だ い の お だ い く ま も と の お だ い
 の お だ い の お だ い く ま も と の お だ い

演題 熊本農業。未来が変わる。未来がわかる。



講師 山下 弘幸氏

- 内容
- ◇農業改革の結果が明らかになる
 - ◇農業経済の流れが変わる
 - ◇農業社会の構成員になるためには
 - ◇農業技術の進歩は農家のためではない!?

●山下弘幸(やましたひろゆき)氏プロフィール

新規農業参入から、農業ビジネス戦略まで、農業事業者、経営者を幅広くサポートする『企業専門の農業戦略コンサルタント』

- 1969年 熊本益城生まれ。農家の3代目
- 1989年 熊本県立農業大学校を卒業後就農。スイカ、ナス、ホウレン草など野菜を主に経営。4HC県連事務局他、消防団、PTA、農協青壮年部など地域活動に尽力する傍ら、27歳で経営開始。以来20年にわたって農業経営に従事。『継ぐ農業』を実践。
- 2007年 ベンチャー企業「果実堂」に中途採用され、同農業生産法人代表取締役役に就任。
- 2012年 全国初となる農業参入専門のコンサルタント会社「株式会社農テラス」設立。
- 2016年 農業ビジネス支援企業(自治体農業支援含む)は80社を達成。
9月には経団連会館にて大手企業を対象に企業参入セミナーや台湾高雄市にて農業ビジネス講演を行うなどこれまでの講演セミナー受講者は8,000名を超えた。
- 2017年3月 農業生産工程の国際基準であるグローバルGAPコンサルタント補取得。
9月 単身渡蘭。農業コンサルタント先進地オランダにて最先端のスキルを学ぶ。

《役職》 くまもと農業アカデミー講師、水俣・芦北地域雇用創造協議会農業アドバイザー、

《現在》 熊本県立農業大学校にて農業ビジネス・農業経営の講師や若手農業者、新規農業者を対象にした私塾『未来農業会議』を主宰するなど後進の育成に力を注いでいる。

《主なオンライン掲載記事》[東洋経済オンライン]「儲からない」農業企業が絶対気づかない視点
[小学館NEWSポストセブン]「農業ビジネス」参入企業の8割が失敗してしまう理由

《主な取材記事》[ダイヤモンドZAI 2017年5月号] TPP解体!でも日本の農業は大きく変わる!

[財界九州2016年11月号] 農業の未来を明るく照らす環境づくりに奔走

テーマ 未来の農業、未来の農大、未来の農人^{ノート}

○コーディネーター **山下 弘幸氏** 株式会社「農テラス」代表取締役

○パネリスト **澤村 輝彦氏**

プロフィール

農大1期生。宇城市不知火町で自家製ほかし肥料などを使った環境保全型農業と有機栽培によるトマトを中心とした経営に取り組む。平成13年には、有機農業で自立できる農業を目指し仲間とともに有限会社「肥後あゆみの会」を設立。また、平成27年には新たに加工所「天芯工房」を立ち上げ、有機JASの加工品の製造販売も展開している。

梶原 哲氏

プロフィール

農大1期生。酪農を柱に和牛繁殖と水稻の複合経営に取り組む。

我が家の農業経営だけでなく、県指導農業士や農業委員、そのほか区長や体育協会支部長など地域にも貢献。JAにおいては、平成19年から理事、同28年からは組合長を務めているほか、平成26年から県酪連の理事も担うなど、上益城の地域農業及び県酪農業の牽引役である。

田尻 徹氏

プロフィール

農大23期生。阿蘇郡南阿蘇村でイチゴ、トマト栽培に取り組む。果物や野菜本来の味を伝えたいとイチゴ狩りなどの観光農園や、ジャム・アイスクリームなどの加工品の販売も展開。平成21年には株式会社「みなみ阿蘇」を設立。同28年には菓子・スイーツ店「苺凛香ばいりんか」をオープン。経営の多角化と地域雇用により、地域貢献を図っている。

荒木 亮氏

熊本県立農業大学校 第21代校長